海に昇る旭のかげの霧の中に玉子のやうにうかみをるかな。

波の音と網繰る歌の聞え來るきりたちこめて海は見えなくに。

三・七・二七

敷香へ行く途中

きりかぶの白くのこれる青原にあやめかんぞの花咲きさかる。

さらさらと波寄せてをる砂濱をわが自動車のひたはしりゆく。

ところどころ丸木ちらばりうちあげし鱒よこたはる砂濱ゆくも。

砂濱をはしる車のあとを追ひおろつこの子のはしりくるかな。

あそびをるおろつこの子に錢やれば近づいて來し可愛い顏して。

波走るあさせに馬の二三十子供の樣に遊びをるなり。

おろつこの鱒の腹割く板の間に赤き血潮の流れを
るかな。

三・七・二八

敷香にて

幌内の川を渡りておろつこのすめる部落を尋ねけ
るかな。

おろつこの部落に入れば大いなるむくげの犬のあ
またをりけり。

横丸太つみし小家のわきゆけば干鱒のにほひはな
をつくかな。

大川をむれつつのぼる鱒はねて夕陽に白き腹を見
せけり。

三・七・二八

敷香よりの歸途

鱒のぼる谷川の橋に車とめてとど松山にのぼる月
見る。

波走る淺瀨にむれて子供等の散らばる鱒を拾ひを
るかな。

波寄する砂濱走る自動車の車輪を打ちて波のくだ
くる。

香水をふりかけくれしはんけちのにほひかぎつつ
人思ひをり。

草原にましろくさけるおろしやぎく黄色のしべの
なつかしきかな。

三・七・二八

九。日ざかり

湯の川にて

たがかやをつりわすれけん夜ふけて蚊のせめくれば起きてものかく。

夜ふけてひとりいで湯にひたりつつとなり湯殿の追分をきく。

三・八・二

黒石にて

ぽつぽつと障子にあたる蟲の音ききつつ靜かにものをかくかな。

三・八・三

花輪にて

字をかいてつかれしままにねころべばなぐさめるがに鈴蟲のなく。

三・八・四

淺蟲にて

湯を出でて海につき出るばるこにの椅子によりつつ島山を見る。

灣ふかく山にかこまれ大いなる池のごと見ゆ波の靜けく。

椅子により海見てをれば赤とんぼすうととびきてひざにとまれり。

わきにありしいとけなき子がわが膝のとんぼをとりて笑みにけるかな。

三・八・五

大洗にて

海神は何を怒るか大波の白けむり立てていそによせくる。

どうどうと波うちよする岩かどの旅館の宵を磯節きくも。

波の音にのりて涼しき安中の磯節きいて靜まりをるも。

潮風のはだに涼しき夜のふけて秋の夜聞けば秋近きかも。

草原に桃色石竹手折りつつ暮鳥の詩碑にささげつるかな。

ここに逢うてここに別れし詩人の詩碑のみのこる人はあらなく。

願入寺にて

由緒あるみ寺に詣であれはてし堂に聖の御筆をがむも。

三・八・六

義公の墓に詣でて

たばこかる野道をすぎて蟬のなく御墓に詣でみ魂かしこむ。

西山荘にて

日本史をあみまししし室のまる窓の前にすわりてひぐらしを聞く。

沈石寺にて

入西にたまひし御影にむかひつつ我が目つたなくかなし見えざり。

三・八・七

一握の藁

三人はろくにかたらずむすばれしこころいだきて汽車の旅する。

ひとりぞとただ一語を涙していひける人をいとほ
しむかな。

かへりみてやましからねど悲しめる人をしみれば
こころをぐらき。

もえさかる愛なきわれを見かぎりてひとりさりゆ
くあとふしをがむ。

來るものはこばまざれどもさるものに心ひかるる
われにもあるかな。

いやはてにさぐりあてたる一握のわらをもすてて
ひとりたつかな。

めざむればすべてさびしきさびしさにをれざるほ
どにすべてさびしき。

涙してしづかにありし三人はだまりしままに別れ
けるかな。

愛はうれしされども愛の牢獄のとりことなるにた
へぬわれなり。

あらそへる二つのたまをあとにしてはるかに海を
こえてゆくなり。（車中）

三・八・二八

一〇。朝鮮雑詠

釜山にて

龍頭にのぼりて見れば月高く絶影島の上にかかれり。

みづからの老を思はず人の身の老におどろき笑ひけるかな。

ぢりぢりとあせばむ肌をそよ風にふかれてものをかきふけるかな。

三・八・三一

京城にて

妓生のしろきころもに手をふれてわが子のやうに近よりてみる。

三・九・三

牡丹臺にて

悠々と流るる水を見おろしてお牧の茶屋に蟲をきくかな。

箕子陵の塚をめぐりて珍らしみ石人石馬をなでまはりけり。

葉柳の蔭にいこひて洋々と流るる水をあかずみてあり。

三・九・五

三墓里にて

二千年前の古墳の中に入り壁畫の線をあかずみるかな。

後の人のかくしてみると思ひかけず石に描きし畫のおもしろき。

とことはにここに靜まるたましひをなぐさめんとてかきたる畫かも。

三・九・六

開城にて

高麗のふるきみやゐのあととへば青草しげりまつむしのなく。

三・九・七

仁川にて

石段をあへぎてのぼり門につきまちのともしをふりかへりみる。

高臺のみ寺の庭になまぬるき大風ふく夜蟲のなきをる。

三・九・八

停車場のべんちの下にこほろぎのあしたさやかにないてをるかな。

三・九・九

鐵原にて

わがなせるあやまちゆゑに人たちのなやむをみればこころいたむも。

同胞の白衣のすそに秋風の寒げに見ゆるあしたなるかな。

戀もよしされどもわれは戀ゆゑに尊きみたましばるほりせず。

行くところ小山起伏し鷄林は晴れしおもひのわかぬ國なり。

三・九・九

井邑にて

をさな子に手をひかれつつ鈴蟲のすだく野道を寺にゆきけり。

三・九・一三

群山にて

めづらしく母にまみえしゆめさめて蟲の音さびしからのはたごや。

蟲の音の靜かなる夜を母戀ひて心ゆたかに夜をあかしけり。

雨にぬれぬかるみ道を海沿の開墾村をまはりける かな。

三・九・一六

論山にて

川向の柳しだるる家の内に妓生たちの歌ならふかな。

しらじらとあくるころより鼓うちしらべまぬるきうたのきこゆる。

三・九・一六

慶州にて

雨にぬれ水を渡りて慶州の古き都の跡とひまはる。

傾ける瞻星臺の前にたちそぼふる中を寫眞とりけり。

半月城の跡訪へば畑青く村の童の瓦うりにくる。

いにしへの王のかむりし黄金のかんむり光るうす
ぐらき日に。

ほりだしの金のかんむり手にとりてふるき榮華の
あとをしのびぬ。

山上にただひとつある宿の夜雨の音きこえ琴の音
きこゆ。

かたことと硝子戸のなりひゆうひゆうと雨風のす
さび夜の更けゆく。

かかるをり木魚の音のもれ來なばなど思ひをる雨
の宵かな。

雨の音に耳かたむけてひろきまにひとりゆたかに
靜まりをるも。

雨風のあるるま夜中こほろぎはしらべゆたかにす
だきをるかな。

千年へしのみのにほひにいにしへの人のこころの
ゆたかさ思ふ。

雨風にぬれし衣の袖しばりみねのいはやのみ佛をがむ。

三・九・一八

大邱をたつ

そばの花あしたほのじろ露にぬれてつつましやかに日の出まつかな。

そば白く稻は黃いろにおりなせるひろ野をめぐるひく山うねり。

半黃ばむ稻田の水にひたされてけさも小雨のふりやまぬかな。

凶作の稻田をみれば道をゆく白衣の人のかげのとぼしき。

細長きほぷらに秋の風つよく折れがてに幹のあはれたわめり。

三・九・二〇

鎭海にて

頰ずりをすればうれしもをさな子をだいて頰ずりすればうれしも。

支那めける觀音堂の前庭に葉鷄頭ま赤に色づいてあり。

三・九・二〇

船中にて

風をふくむ白帆の船のゆきかへるあさみどりして
しづけき海に。

あかつきのでつきをあるき汐風にあせばむ肌をふ
かれをるかな。

ほのじろく海あけゆけばうすぐろく大和島根の山
見えそめぬ。

三・九・二二

一一。紅葉する頃

戸畑にて

けほいよき臺灣あしの横にたちけをいよろこび見
あげつるかな。

さけかけし芭蕉のかげにたたずみてじんじやの花
に顔よせてかぐ。

大輪の眞紅のかんな色はえて芝生の色の秋のあか
るき。

ふらりふらりへちまのさがるへちま棚秋やや更けて葉の黄ばみけり。

やむ人をなぐさめんとてつくりたるへちまさがれり人はあらなくに。（至君をしのぶ）

三・九・二三

大分にて

定朝の作と傳ふる大佛に秋風寒くふいてをるかな。

かざりなくがらんとしたる荒堂にびるしやな佛の端座ましまします。

閉ざされし荒堂の中にるしやな佛お淋しくしてすわりましまします。

肌寒き風にふかれて郊外に古き石佛ををがみまはりぬ。

三・九・二五

佐賀にて

ぶろにゆの森に杖ひく人しのぶ晴れたる秋の空に見入りて。

たまさかのひとりゐうれし庭の面の木の葉に動く秋の風みる。

うそいはぬ人となれかしうそをせぬ人となれかし
ただこれのみを。（幼き清吉君に）　三・九・二六

いちじゆくの小さきたねの齒にさはる音の靜けき
秋の宵かな。

樂しげに酒のむ友といちじゆくをあぢはひながら
語りけるかな。

酒なめて酒のむ友と月の夜のふくるをしらず語り
けるかな。　三・九・二七

福岡にて

松の根に腰をおろしてまんまるき木の間にかかる
月を見るかな。

電灯の照らざる丘を探しあてて靜かに月をながめ
つるかな。

名月の光あびつつ野をゆけば蟲いろいろにうたひ
をるかな。

すみわたる月にむかひてすみきらぬおのが心のう
らはづかしき。

この月にわれ思ふ人の誰々を思ひ數へて心ゆたけき。

夜更けて月見かへりを宮前の店にたちより栗を買ひけり。

人妻の皮むきくるる栗たべてなほも見あかず月をめでけり。

大つぶのうれしぶだうに白き粉のふけるめでけり月さすへやに。

なさけこめし肌衣身につけあたたかく人をしのびぬ秋風ふくに。

三・九・二八

箱島にひるげしたため海越しにひれふる山をながめけるかな。

千年の前なる人の手になりし古き瓦をなつかしむかな。

かへりさきの櫻の花の月かげにうらさびしげにさくをみるかな。

あまり月のうつくしければいねがてに干場にいでてなほも見てあり。

三・九・二九

木屋にて

月かげのあまりまどかにてりをるがさびしとかきし文をよみけり。

大いなる心尊ぶその心われにさびしとつげこしかな。

よろこびをあたへんためとせしことのなやみのたねとなりにけるかな。

若人の愛のほのほにやかるるにそはずうるほふわが心かな。

火の道を共に歩むにわがまなこあまりあかるしこれに悔なし。

われによるすべての人をふりはなし強く生きゆく人となさばや。

徳高き聖人おはせし古寺のかやぶきの堂のなつかしきかな。

簾目の正しき庭にこすもすののんびりふとりさい
てをるかな。

ふさなれる柿の小枝をぬり盆にうづ高うもりてか
ざりあるかな。

われまつと植ゑしといへるこすもすの花ささか
りわれをまちあり。

秋の日のあはくわびしくくれてゆく庭にかけひの
音のさやけき。

三・一〇・四

大牟田にて

せめて一日休み得たしと思ひけり風邪の氣味にの
どの痛めば。

かひがひし職工服の女工らの群にむかひて涙しに
けり。

三・一〇・六

熊本にて

いつのよもいづこにゆくもまごころのひとにうち
かつなにものもなし。

天川屋儀兵衛がことに男ぞと名のりし男子なつか
しきかな。

むくむくと苦のなささうに肥えてゐても女なれば
ぞなやみもあらめ。

しかられてないてかへりしあのをりのなみだの顔
のわすられなくに。

我が母はひとり子のわれをそだつるにいばらの中
も堪へてきませり。

秋雲のさびしさにたへぬ心もちて親しき人の集ひ
けるかな。

三・一〇・七

母様と聲をはりつめて呼びたまへなきがらいだき
泣きまろびませ。（松田かね子の母上のみまかられしをききて）

今年亦松たけ飯をよばれけりだりやの花も去年の
ごとくに。

障子しめて語らふほどに秋風のけふしも肌にしみ
わたるかな。

人の世をこゆる心にしみじみとひと戀ひわたるわ
れをみるかな。

ひとりゐのさびしき人を胸のうちにふかくいだき
て旅をつづくる。

三・一〇・八

八代にて

つづけさまにいちじゆくの實をなつまで貪るや
うにくひにけるかな。

落葉はく音のきこえて秋の日のあはく障子にくれ
てゆくかな。

きくことにすなほに法をきくことに十年かはらぬ
人なつかしき。

四年ぶりにあへばいつしかしをらしき女とそだち
いたりけるかな。

三・一〇・九

湯の前にて

おといへばこたへはなくてゆるゆると向ひの岸ゆ
渡舟の來る。

山川の渡しを渡す渡守女なりけりおもむきあり
き。

木犀の大きな花さく寺の庭に香をなつかしみあか
ずさまよふ。

清冽の谷川渡り秋晴の稲刈る村に入りにけるかな。

猫寺の猫の記念の大檜三本そろひ天をつきをる。

稲田みゆる庭に椅子だし秋の日のほてりに髪を刈らしつるかな。

てうちそばのうまかりければ夜も晝も飯をよばれずそばのみをくふ。

三・一〇・一二

人吉にて

きりこめて向ひの岸の見えわかずただ瀬の音のはるかにきこゆ。

きりの中に朝日ほのかに見えそめてせきれいの聲の聞えつるかな。

あとを追ひそのあと追ひて急ぎつつ流るる水をあかず見るかな。

酒ずきの酒のみやめてひたすらに道にすすむをよろこびをるも。

年毎になき父上のおもかげにてゆく人をなつかしむかな。

愛によるなやみはさこそさりながら愛のあなたの愛に吾はあれ。

世にわれのあらん限りは自らを尊きものといたはりたまへ。

文みればこころくるしく文みねば心たらはず秋の日はゆく。

けふもまた川上の山ゆいでし日の川しもの山に沈みゆくかな。

默々とふちを流るる河水の淺瀨に音をたててゆくかな。

沈みゆく秋の日かげの流れをる川つらゆるくのぼる舟かな。

わが名ききわれにまみゆる人たちによるこびあれとねがひをるかな。

たまさかのひとりゐうれし夕ぐれの川の流をしみじみと見る。

足もとに尊きものをふみにじるむくいと知れよその苦しみを。

人とをるせはしさいとひひとりゐのゆたかさめづる秋の夕ぐれ。

靜かさをこのさびしさをよろこびて沈みゆく日ををがみをるかな。

夕ぐれの大川つらに人ひとりのれる小舟のうかびをるかな。

人の世にふるればくるしさりながら人にしあればおのづからふる。

ひとりねの隣ざしきに人もゐずこころゆたかに瀬の音をきく。

折々にひとりゐたしと思召す時もあらめととはれたるかな。

若人のもてきし柿の皮はいでをるま筆とりうたを
かきをる。

三・一〇・一四

伊牟禮にて

庭にでて葉とり實をとりつまびらかにうべとあき
びのけぢめならへり。

さわやかにはるる日うけてときいろのこすもすの
花榮えてをるかな。

ひとりゐはさびしけれどもひとりゐるゆたかなる
よも味はるるなり。

法をきくとまちをはなれて里にゆけばそば花しろ
く日に光りをる。

三・一〇・一七

知覽にて

川の瀨はものに激して何事か天に向ひて叫びつゞ
くる。

山を出るあさ日にむかひ緣にたてば谷の林に百舌
のなくかな。

三・一〇・一八

菊永にて

犬の子のやうに小さき家の子が秋日の庭に遊びを
るかな。

庭における石ぶろにひたりかしの木に五日の月のかかれるを見る。

村出れば五日の月は見はるかす芋の畑にすんでをるかな。

さわさわと桑の葉になる秋風に耳をすまして道をゆくかな。

村人の心づくしのもてなしにゆたかなる世を味ひをるも。

我がためにめづらしき蘭を探しくれしなさけうれしき秋晴のあさ。

われまちてゐしてふきみの三人の子まで殘して急ぎ逝きけり。（去年親しく側にきし人の死にしと聞きて）

をとこをんな村人集ひわれむかへそばなどたうべうたげするかな。

南國も秋ややふけて夜になれば火鉢戀しうなりにけるかな。

次の間にをとこをんなの興ずるを火鉢によりてきいてをるかな。

三・一〇・一九

途中

峠路を出れば海見えさくら島秋日の中にけむりはきをる。

世をうらみ人をにくみしをりにさへ人のなさけの中にありけり。

秋晴の十里の野道自動車の走れば風の肌につめたき。

三・一〇・二一

鹿児島にて

秋風の日毎に寒くなりゆきてひきしまりゆくこころうれしき。

かへりくれば玉の小つぼにましろなるこすもすの花いけてあるかな。

三・一〇・二一

飯野にて

夜もすがら子をよびさがすはは猫の悲しき聲にねむれざりけり。

狂ほしき猫のなく音のおそろしく電燈をともしいねにけるかな。

三・一〇・二六

志布志にて

人形のやうに小さいかはい子の踊をみつつ秋の夜ふけぬ。

三・一〇・二八

津久見にて

板橋の幅を貰うて秋の夜に春潮みつるここちするかな。

千年へし石の佛をふしをがみ遠つみおやの信にわけ入る。

雨に風に千年へたまふ石佛なほ端嚴のみ顔くづれず。

千年へし石の仁王は田の畦に腰まで埋れたちおはすかな。

三・一一・五

途中吟

手をうつて踊り出したき心地するよろこびは何さだかならねど。

よくかめば味の出でくるかんらんに似たる性もつ人をいとしむ。

三・一一・七

櫻井にて

瀬の音のすみてきこゆる山里にとまりしあした畑を見まはる。

はるばるとわれにまみゆときし人の老のすがたに
涙するかな。

三・一一・一七

五箇庄にて

母戀ふるわれにしあれば母のことつぐるながこと
あかずききけり。

人去りて殘る德香にひたりつつその人しのぶ夜靜
かなり。

やごとなき方のめしけるみころもに手をふれてみ
る冬の宵かな。

習はんとはげむよりほかに人の子を導くすべのつ
ひにあらざり。

かけ稻の横にたたずみ近山の朝日にてれる紅葉見
るかな。

三・一一・二一

初孫宣を得て

孫なるが故なる愛かをさな子の故なる愛かのる子
かはゆし。

ひげの頰をよせてめづればむつがりてのる子は何
かつぶやきしかな。

玄關にかへるやいなや嫁のいだくのる子のかほを
なでまはすかな。

町の家の報恩講まはりのかへるさにがらがらなん
ど買うてかへりぬ。

家中がのる子の愛にいさみたち春くるやうににぎ
はへるかな。

なごやかにのる子はふとりかほの肉のまんまるか
たくふくらみをるも。

人達はのる子の笑得るためにおのれわすれておど
けをるかな。

日毎ふとり日毎かはゆくなりてゆくのる子を見れ
ば日にねうちあり。

のる子故に家はにぎはひらちもなき笑の聲のあふ
れをるかな。

老人に家はしづまり幼な子に家はやはらぎともに
よろしも。

朝まだきのる子の聲のきこゆればいさみて床のでられぬるかな。

わが家にのる子生れてよその家の赤ん坊をだくこころえしかな。

子の親に負ひける恩も重けれど親の子に負ふ恩も輕からず。

お人形ののる子かはゆしお人形のおめんめうごきおててもうごく。

墨染の衣のひざに友禪をきたるのる子をのせてをどらす。

子をもたず子の愛知らぬわれなれどのる子に心ひかれつるかな。

われ生れ五十二年目わが家に赤子の聲のきこえつるかな。

あまり人の抱きめづればこのおもちやこはれやすると氣づかはれぬる。

湯上りの身をふきやればうれしげに小さき手あしを動かしをるも。

手をにぎり身をふるはして小踊りし小さきのる子は何かさけべり。

三・一二・二

歳暮雜詠

うす雪のとけかかりたる大根田に日かげ靜かに流れをるかな。

うす雪のかのこまだらにつむ野邊にあさ日うらら照りてをるかな。

すちいむのあまりあつければまどあけて雪ふる野邊の風を入れけり。

一年のすべて休らひ一年のすべて働くわれにもあるかな。

一年を南に北にはせまはりあまりせはしくくれてゆくかな。

來る年のせはしき日々をはかりつついこふ日のなきわれにほほゑむ。

春空に日の照りをるにひらひらと和毛の如き雪の
ふるかな。

ひたふるに雪ふりしきる横なぐり汽車の窓うち雪
ふりしきる。

雪の丘に高くそびゆる松の木のつよきふぶきにま
みれをるかな。（車中にて）

三・一二・九

一二。寒風の中を

福井にて

寒けれど雪はうれしき世を染めて清けくのこる雪
はうれしき。

いろいろの新しきものにふれて行くよろこび抱き
歳をむかへぬ。

あたらしくわれにたむけし布團きて夢あたたかく
むすびけるかな。

よしあしのけぢめ思はずはればれと廣きみ空をあふぎゆかばや。

をりをりは火鉢に手をばあぶりつつ冬の一日を字をかきにけり。

四・一・一七

磯波にて

おしなべて白く雪つむそのはての杉の木立に日のくれんとす。

去年ありし人はおはさず首たれて深雪ふみわけ弔ひに行く。

生れんとする子待ちつつ家のうちに冬としいふに春の氣の滿つ。

ひたぶるにふりたる雪はふりやみて雪の廣原日かげまばゆし。

四・一・二三

北海道に行く人の屏風にかきし歌

白山の雪の姿を思ひ出て故郷人の心忘るな。

ふるさとを思ふ心に勇みたちてわが行く道に怠らずゆけ。

北國のはてにゆくともみ佛の光りの中に幸あれと
こそ。

どこにゆくもまことにまさる力なしまことたのみ
て勇しくゆけ。

いづれ死ぬ身を投げ出して常住のみ國の道をひと
すぢにゆけ。

遠つおやのいさをしのこる故郷を忘れずゆけば道
の開けむ。

四・一・二五

別府にて

たちのぼる湯けむりすひつときめきて繪筆しきり
に動きけるかな。（海地獄にて）

いきりたつ芋をくひつつ湯地獄を親しき友とめぐ
りをるかな。

いきりたつ湯池の橋に犬二つあたたかさうにねむ
りをるかな。

あやまりて砂湯にはいり臀の先をあかくそめしと
言ひにけるかな。

四・二・三

耶馬溪にて

うぐひすの初音うれしも羅漢寺の岩の細道よぢのぼりつつ。

羅漢寺の眞暗のほらをのぼりつつあやまちて手に傷を得にけり。

筆なげの岩の下ゆく川に出て家づとにすと石をひろひぬ。

深耶馬溪にて

巖見に川に下りたてば岩にゐし猿おどろきて山にかくれぬ。

川ぶちに野茨の實の赤玉を藥にすると取りにけるかな。

鮎うどんの鮎といふのにひかれつつ一目八景にうどんくひけり。

やや重き石を拾ひて持ちあぐみ砂にまみれて抱き來にけり。

四・二・六

戸畑にて

しくらめんの鉢を置きたる食卓をうからかこみてにぎはひをるも。

四・二・九

直方にて

風寒き元日の夜を友集ひこたつかこみてかたりけるかな。

風やみて靜かなる夜を屏風たてて香をたきつつ更しけるかな。

池そひの丘にたちたる一つ家の障子たちあはず風に身ふるふ。

くれなゐの寒牡丹の花の散るをとめてわれ待ちけりと言へりうれしも。

疲れはててあふむけにねて眼つむりしあひだに友のすべて去りけり。

あたたかきこたつにあたり溫室になりし苺をよばれける哉。

四・二・一〇

香月にて

二里ばかりへだたる町に夜更けて湯たんぽ買ひにやりにける哉。

四・二・一二

見はるかす流れのあなた葉柳のうす墨色にくもり居るかな。（繪に題して）

刈田にて

黎明の窓に雀のちよちよと母の名よびて夢さましけり。

雀子のぢなきさへづりききそみて朝の床にぬくもりをるも。

うす雪をしのぎて青き水仙の花さきさかる磯近き庭。

來る人はみな高らかに語りをる濱邊のやどのゆたかなるかな。

花つくり石を愛する百姓のむづかしきふみをふけり讀むかな。

したき事のあまりにしげき此頃は時のたらぬに心せはしき。

病あれば病の中にみづからをふかく見つめて靜まりたまへ。（病床の友に）

ゆたかなる村人の愛にくつろぎてめづらしく繪をかきにけるかな。

四・二・一三

後藤寺にて

老梅の幹おもしろく若枝のいきほひよきにまばら花さく。

四・二・一五

法事を營みて

なき人の思出ふかく壇に立ちむねふさがりて物の云へざり。

集まれるどの人見てもわだかまりなき顏ばかり春ゆたかなり。

はるばると南の國の友のくれし水仙の香にぬくまりをるも。

心こめし法事のはてて春の夜を木蓮の花にとけてをるかな。

我が名ききゆる諸人によろこびあれと念じをるかな。

外の面には雪の積るに水仙のかほりの中にかたらへるかな。

一念の願ひの前にふるひ立ちて水をも火をもたへてゆかばや。

法事をへしうれし心にはらからと繪かき書かきくつろげるかな。

新らしき五色の幕に早春の法事日和の風ゆるくふく。

四・二・二

聖德太子の御陵にて

砂の上にうづくまりつつをろがめばみ靈したしく召したまふかな。

あな尊あなつかしや日の本のみ佛なれやわがすめらみこ。

その昔聖人の靈夢をうけまししみくらはいづこ早春日の照る。

早春日の照れる野道をさすらひつ梅鉢御陵を拜みまはりぬ。

鹿谷寺にて

谷ふかきせせらぎにかけし水車かたことなり靜かなるかな。

ちらちらと雪のふる日に鶯の關をこゆればささなきをるも。

黒谷のみ寺のあとのみ佛とならびたちけり雪のふる日に。

四・三・四

岡山にて

ひりひりといたむやけどを忘れんと短冊とりてうたを書くかな。

珍らしくみづから茶をばくまんとてあやまりて火傷をしたりける哉。

これほどのことと思へどひりひりとすれば心の引かれつるかな。

堪へかねてつひに茶碗をなげにけり熱茶の指にこぼれかかれば。

いろいろの薬をぬれどひりひりと痛みは去らず夜の更けてゆく。

白木蓮の花は靜にさきをるにやけどのいたみ心落ちぬず。

火傷いたみ忍びてうたを書きをればそばなる友は茶をまはしのむ。

やけどして痛めるからにおのが愚のしられてひとりほほ笑めるかな。

四・三・五

吉備津にて

吉備の宮の後の森をさすらひて初鶯をききにけるかな。

四・三・六

梅かをる長き廊下をもとほりて杉のみやゐの鶯をきく。

倉敷にて

われ待つとをさな兒達が野に出でてつみしとふつくしをもてなされけり。

四・三・六

廣島にて

死の念はうき世の執の中にわく佛念へば死の念はなし。

桃山の桃のつぼみに淡雪のむごたらしくもふりしきるかな。

人の世のなさけはうれしさりながらなさけに酔はばほろびにいらん。

ただひとつ開かれてある念佛の寂しき道をいさみゆくかな。

世のきづな涙とともに切りすてて光もとめて廣野ゆくかな。（出家の釋迦に題して）

四・三・一二

出雲大社に詣でて

大鳥居の前に車をとどめ置きふぶきの中をうつむきてゆく。

綿雪のふきこむ殿にぬかづきて巫子のはらひをうけにけるかな。

四・三・一四

平井氏の屏風にかけるうたのうち

いつのまに色づきにけむ村も山も青々としていさみをるかな。

若者はおそれかしこみ祕めおきしなやみかたるにわれ泣かんとす。

あたたかき彼岸日和の夕ぐれに人とはなれてひとりうたかく。

天地にただひとつなるおんまことそのみまことに生れ出しかな。

一念の信の焔に大千をやきつくさんといさみをるかな。

火の上にあるをさとらずうかうかと日をすごすなりおろかなるかな。

あしもとに死をみつめつつそをこえてねがひの道をいさみゆくかな。

四・四・二

一三。北米の旅

北安田にて

とつくにに旅だつあした紅梅のつぼみあかあかいろづけるかな。

ほのぼのとあさ日ににほふ紅梅をかへりみしつつ旅に出るかな。

四・四・五

京都にて

異國の人の心にひそみをるほとけを見んと船出するかな。

禪寺の筍の味にうしろ髪つよく引かれてこと國に行く。

四・四・六

西の宮にて

み佛のあれましし日をことほぐと白木蓮の花の咲きにけるかな。（松本家にて）

異國に行くを送ると日の本のさくらの花の咲きさかるかな。

（四・四・八）

天洋丸にて

金のくに機械の國のあめりかに人のまことを見んとわれ行く。

日の本の花にそむきて海はるかわがかげ追うて船出するかな。

四・四・一〇

うつくしき花に送られ春かすみたなびく海に船出せしかな。

うるほひのある花の雨に送られていさみながらも涙するかな。

せめてもの思ひをつなぐ五色のてつぷに雨のむごく降りけり。

わぎも子は最後の銅鑼に驚きておろおろ船を下りて行きけり。

四・四・一二

夜も晝も獨りきやびんに寢てあれば自ら念佛湧き出づるかな。

獨り居のきやびんゆたかに別れ來し懷しき人を戀わたるかな。

四・四・一三

大洋にふさはぬしぶしぶ雨が降り旅の心のうるほへるかな。

數多き見送りの中にうつむきてわれを見ざりしあの人ばかり。

惠まれの我にしあれば我が乘れる海の行手に禍あらじ。

とつ國の幼な子の母にあまへ居る聲に聞きほるる隣の部屋に。

四・四・一四

朝飯を終へてでつきの長椅子に寢轉びながら海を見るかな。

椅子に寝る頬にしぶきの觸れてよき太平洋の春の雨かな。

ぺんき塗り船の中なるぺんき塗り終日ぺんき塗りて暮せり。

天地のめぐみになれし獨り子はあつき惠みに常にたらへり。

子を連れし若き女の折々に我が室に來て道を問ひけり。

獨り居て人戀ひをれば何事の障りもあらで心くつろぐ。

四・四・一五

一

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからにやはらぎあれよ。

二

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからにうやまひあれよ。

三

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからにくつろぎあれよ。

四

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからにつつしみあれよ。

五

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからによろこびあれよ。

六

みほとけに召されてここにつどひたる我がはらからにかがやきあれよ。（以上六首讃佛歌）

みちりみちり船床の軋む音にさへ馴れてのどけき夢に入りけり。

日の本の名殘とどむる生け花のしをれて悲し船路遙けく。

萎れたる花見れば悲しさりながら捨てるにたへず其儘におく。

四・四・一七

珍らしく船にあひければ船の中の人喜びにどよめけるかな。

菜畑を耕しつかれ畦にいこひひさごかたむく太平の民。（船長室にて或人の繪に贊す）

夕暮の川添ひ道をかへり來れば村のお寺の鐘の聞ゆる。（同上）

四・四・一七

ホノルルにて

手を合せ我を拜みて去り行きし人なつかしく思ひ居るかな。

四・四・二一

高臺に車走らせ海沿ひの町のともしを眺めつるかな。

大なるぱるむとりいの下に立ちいだき見にけりもの珍らしく。

四・四・二三

火山にて

煙立つ地ひびの横にたたずみて心に燃ゆる火を顧る。

どろどろと硫黄はき出す谷間にあたたかき硫黄を拾ひけるかな。

鳥のなく山に遊びて山苺とりてよろこびあうてをるかな。

苺つみほほづきとりてもろ鳥のなく音ききつつ山遊びすも。

月見草山吹桔梗山菊の花さきてあり鳥なく林。

とつ國にたらちねの逝きし日を迎へ好みたまひし筍を捧ぐ。

四・四・二九

ヒロにて

椰子島の椰子の木蔭にたたずみて小舟漕ぎくるかなか人見る。

あんもらの大木の下に房になるあんもらを見てみ佛を想ふ。

椰子並木續ける町を夕暮の風なつかしみ車走らす。

今日も亦日毎雨降るひろの町ひねもす晴れし日にあはざりき。

書くことに稍疲れたる四つさがり冷えしぱぱいやに息をつぐかな。

いにしへのかなかの人の祀りたるかふなの像を貰ひたるかな。

ここも亦やまとの人の住む家か椰子の木の間に鯉幟たつ。

四・五・三

見晴の好き部屋に居て波の音に聞き惚れ居ればさりあへぬかな。

ふるさとの壽司のもてなしなつかしき異國の島にさすらふ我に。

四・五・六

カワイ島にて

こうけいの谷見下せば谷ふかく川の流れて白き鳥とぶ。

草青き三千尺の谷底に動くものあり山生の山羊。

山の端のこわの枯れ枝に靜まりて我が車見る雉子のありけり。

山の上の庵にうたげしみはるかす海のあなたのふるさと思ふ。

山の端の小川のへりに車下りてらんちやなの花を手折りみるかな。

らんちやなの花はかはゆしらんちやなは種々の色
に咲いて珍らし。　四・五・一〇

いにしへのかなかの人の用ひたる石の器を貰ひつ
るかな。

かなか人の用ひし石器のいろいろを貰ひてうれし
わいめあの寺。　四・五・一一

ホノルルにて

見はるかすぱいんあつぷるの高丘のあなたの海に
赤く日のいる。

かなか人の笑ひ晴れ晴れやしの木の林にもれて夕
風すずし。

雪舟の繪に見るごとくそそりたつ山めづらしみあ
かず見るかな。

きび畑にほれぼれうたをうたひつつ働く人をふし
をがむかな。

ほのるるの別れの夕もてなしのふらふら踊涙して
見る。

ほのるるの終りの夜更まつさあぢの供養をうけて
くつろげるかな。

四・五・一七

春洋丸にて

金色の雲を名殘にしづしづとわが太陽は海にいり
けり。

けふも亦海穩かに日のくるる夕やけ雲に人戀ひを
るも。

夕雲はどこにゆきしか月一つそらと海とを照しを
るかな。

船室にひとりしあればさわやかに念佛あふれて氣
のすみわたる。

四・五・一九

晩餐にふとして入齒のかけしより心のいやに沈み
ゆくかな。

四・五・二〇

灯の消えし甲板にひとりたたずみて太平洋を照す
月見る。

乘りこみし大和の船の食卓のつつじの花にふるさ
と思ふ。

ふとけふは淨華院の日と思ひ出しきやびんの夜更
讀經するかな。

四・五・二一

人達の假裝踊にはしやぐを見つつ人の子かはゆし
とおもふ。

たたかひの地より地にゆく船旅をやすらひの日と
人むつみあふ。

人達の享樂にふける船旅をわれは靜かに人の世お
もふ。

船の客はみな子供らしくなるものとある船のりの
いひにけるかな。

かくうたひかく踊りつつはらからの火の坑にいる
すがたいぢらし。

人達よ若者達よ若き日はまたと來らず若やぎたま
へ。

人達の踊の樂をききながら戀しき人に文をかくか
な。

四・五・二二

すれちがふやまとの船をなつかしみ甲板にいでて
人の呼びあふ。

あぢきなき別れもあらん甲板に今宵はうたの哀れ
にきこゆ。

四・五・二三

オークランドにて

森中の小舍に老いたる母とゐしその小舍に來てそ
の人したふ。（オーキンミラーの山莊を訪ひて）

我が植ゑし木々の肥料にと我が骨をわかちあたへ
し詩人戀し。（同上）

若人に手をとられつつ山の上によぢのぼりけり森
のしたしく。（同上）

若人と山にのぼりて森にくれば菓子をくひつつ女
等まてり。（同上）

ゆうかりの實にすべりつつ岩山をよぢのぼりつつ
海の陽をみる。（同上）

すえたあの黄なるふちを輪袈裟かといぶかりなが
ら手をふれしかな。（同上）

ゆきどまりのありたる爲に車かへし山をめぐりて海を見しかな。（同上）

四・五・二七

古本をしたたか買ひし嬉しさに今宵の話は油のりけり。

この國のすべてのことを忘れても忘れざらましめろんのにほひ。

たましひはあめりかの地に我を待てりちえりにもなりめろんにもなり。

欲しかりし寫眞機貰ひ寫眞とることを習へる旅の宵かな。

講話がへり外套もとらず卓上のさくらんぼうをつまみ食ひけり。

あたたかき毛皮にあごをうづめつつ歌たまはれとをんないひけり。

働きて惱みされりとあせし手をいひわけしつつふれにけるかな。

講話はて夜更のかあに冷えし手を溫め貰ふあたたかき手に。

この人の眼に手におのが命をばまかせて安く町まはりせり。

み佛はあめりかの地にあらはれてわれの來るをまちておはせり。

四・五・二八

シイラネバタにて

手をたれてたつ人のごとすくすくと雪ふる山にたてる木々かな。

たつ折に友のくれたるばらの花のにほひかぎつつ雪山こゆる。

あめりかのしいらねばたの山こゆる五月の旅に雪をみるかな。

山やけのありたるあとか雪の山にこげたる木々のいちじるくたつ。

珍らしくあめりかの山に雪を見る脊たかき松にふる雪をみる。

四・五・三一

オグデンにて

若き日の師のおん孫のもてなしにわかき日しのぶ
おぐでんの宵。

四・六・二

デンバアにて

見はるかす高原のはてにろつきいの山ひだ白く光
りをるかな。

高原の草原にたち手をかざしろつきい山の夕映を
見る。

青草の原にくろぐろ掘り出せし石炭の山の光りを
るかな。

四・六・三

途中

汽車はいましぶしぶ雨にけむりをるみししつぴ川
に沿うて走れり。

あめりかを旅する汽車の朝めしに梅干のいりしお
握りをくふ。

高原のあちらこちらにきらきらと夕陽に光るみづ
うみを見る。

高原のいづこを見ても山一つ見えずひろびろ青草
しげる。

見はるかす高原の畑に耕やせし土くろぐろと雨のふりをる。

見はるかす青草原に牛あまた雨にぬれつつ草をはみをる。

あめりかはよい所なり地はひろく花うつくしく果物はうまし。

小雨ふる湖の面に鴨多く降りて遊べり豐かなるかな。

ゆけどゆけど耕してある畑ばかり三日つづけて汽車にのりつつ。

山一つ見えぬ廣野の畑つづきあすぱらかすの青みをるかな。

あめりかの桃のはしりをたべながら汝が住む山の畠しのばゆ。（松田眞一氏に）

苺とる頃としなれば苺とりて遊びたる子のしのばるるかな。（西村伊三郎氏に）

四・六・四

ナイヤガラにて

ないやがらああないやがらないやがらあこがれの
瀧げにないやがら。

ないやがらの瀧にむかひて天地の大なるわざにひ
ざまづくかな。

三つの嶋みどりしたたる三つの嶋はさみて落つる
ま白なる瀧。

ごろごろと落つる瀧の音色どれるみどりの嶋に鳥
のさへづる。

大なる虹の輪のたつ七色の虹の輪のたつ瀧のしぶ
きに。

ごろごろと岩をうち落つ瀧の裏にしぶきあびつつ
瀧を見るかな。

山の岩をそこにつらぬく坑にくだり瀧壺にでて瀧
の裏見る。

ないやがらは大いなるかなこの瀧をもつあめりか
は大いなるかな。

四・六・五

ニウヨルクにて

にうよるくは人のむらがる都なり地の下走り空高く住む。

二十階の窓ぎはに煙草くゆらしてごろごろうなる雑音をきく。

四・六・八

紐育の五十七階のウォル塔に上りて

高き塔に上りて見れば紐育の高き家々はるかにかすむ。

人はみな蟻のごとくにむらがりて右に左に動きをるかな。

四・六・一一

コンコルドにて

あこがれのひじりの家を訪へば庭の芝生にこほろぎのなく。（エマーソンの家にて）

訪ひていこひ待つまに襟元をちさき蚊のきてさしにけるかな。（同上）

青芝の庭にときいろしやくなぎの花ささかり待てるがごとし。（同上）

四・六・一五

こんこるどは鳥なくところ森の木にりすのかはゆくかけまはりをる。

青芝の中に小牛の遊びをるこんこるどの村の豐かなるかな。

四・六・一六

ロングアイランドにて

紐育をわづかはなるる嶋の森にふるさとしのぶお握りをくふ。

鳥のなく森の木蔭にむしろしき心おきなくうたげするかな。

四・六・一八

ニュ・ロッセルにて

青葉かげ光またたく螢火をめづらしみつつ木の下にたつ。

四・六・二〇

ヒラデルヒヤにて

獨立の鐘をうちけるつはもののよろこびのあとをわれも追はまく。

四・六・二三

ワシントンにて

雨上り雫したたる森中に白きやかたのそびえたつかな。

恐ろしき雷雨の晝下り心しづかに古き繪を見る。

いづこよりとび來しものかまあぶるの高きいらかに螢のとべり。

ついて來し人は旅たち殘されし蠅にやあらんわれにまつはる。

日の本ゆうつし植ゑたる櫻木の幹ふとぶとと青葉しげれり。

雫たるさくら青葉の並木ぬひ小さきほたるのとんでをるかな。

四・六・二四

テキサスにて

ゆけどゆけど綿を植ゑあるてきさすの青き廣野を走る汽車かな。

四・六・二五

ニュオルレアンスをたつ時に

みししつぴいをあふるる水に住む蛙なきてしあれば故郷しのぶ。

四・六・二八

アリゾナにて

きらきらと白き日かげの流れをる町をまくろの人のゆきかふ。

銀製のかふすぼたんの熱くなるあつき風ふけど汗の流れず。

白き日の照れる砂漠をゆく汽車に青きもの見ず時をへにけり。

窓閉ざす汽車の中まで砂まじりの熱風つよく頬をうてるかな。

えるぱその町をあるきてめきしこの陶器めづらしみ買ひにける哉。

あつき日に草まで枯るる砂原に小さき家見ゆ人住むらんか。

何はみて住みをるものか草もなきこの砂原に牛を見るかな。

炎熱に堪へざらましと友の言ひし砂漠をすぎて歌あまた得し。

相客の女子達にうるほひて砂漠の汽車にかはきおぼえず。

あつき日の砂漠の旅にあぐみたる夕ぐれ近み川を見るかな。

草も枯るるかかるま夏の砂原にけほひたけりてゆかの花さく。

南のめきしこ近きたくそんの驛に咲きけり夾竹桃の花。

四・六・二九

ロサンゼルスにて

はりうどにてあひしかたみとふらんすの人形を買うて友のくれけり。

おれんぢの熟し落ちある畑に入りそのおれんぢの木の下に立つ。

七色の睡蓮の花のさく池に車とどめて池をめぐりぬ。

地軸よりわく石油に火のつきてもゆる力をなつかしむかな。

四・七・二

サリナスにて

さりなすはよい所なりれーたすのうまい所なり夏も涼しく。

四・七・五

モントレイにて

もんとれいの松原行けば鹿の子の松の木の間に遊び居るかな。

岩角に太平洋の波よせて夏の日をうけ白く光れり。

岩角にさいぷらすの老木たくましく骨をあらはして立ちてをるかな。

幾世へて潮風と戰ひし名殘かもさいぷらすの木の骨あらはなり。

海見ゆる岩角にすわり西瓜わりて顏近くよせて食へる人かな。

鳥島の山の端白く鳥の糞のたまりてあれば美しきかも。

もんとれいの海邊に立ちてこの先に日本のありと太平洋を見る。

岩角にすわりて海を見てあれば色々の花をつみてもて來し。

でるもんとの池のほとりにたたずみて池の面に浮く白鳥を見る。

池のへの花なつかしみ友と共にその前に立ちて寫眞とりけり。

池のへのがまの葉を手にふれしめてやはらかき葉の味ひ語る。

四・七・六

ビッグツリーにて

幾千歳雪霜しのぎふとりきし大木尊み拜まるるかな。

神々し大木のもとにたたずみて空見あぐれば空高くつく。

四・七・七

ヨセミテにて

空をつく白き岩山夏の日を受けてきらきら光りをるかな。

大いなる松の木蔭にたたずみて夏日に光る岩山を見る。

千歳ふる松の木の間にいこひつつやにの香をあかずかぐ哉。

紅葉の谷間を行けば山白く紅き老い木の幹いちじるし。

青空ゆたるる絹かと思はるる空つく峯にかかる白瀧。

岩山をきりてつくれる坂道を馬にのりつつ登りゆくかな。

岩かどの道あぶなげになれる時馬上の友は皆だまりをり。

切り立ての岩山と見し高山に登れば嬉し身も高まりて。

岩角に馬をとどめて谷見れば吹く風涼しく頬を洗ふかな。

登り來し三千尺の岩角に立ちて谷間の家を見るかな。

馬のもつ生命欲をたよりにて危き山路馬にのりてゆく。

驚きて馬の逸しければ砂の上にもろくも落ちて笑ひをる哉。

肅々とばいをふくめて駒ならべ岩かげの道を登り行くかな。

四・七・一一

オークランドにて

花ずきの心かよひてとつ國の花つくる人にむかへられけり。

高き香に心ひかれて紅ばらを手折りて胸にさしにけるかな。

藥より花こそいのちを救はめとくすしをやめて花つくるかな。

ゆくりなくあめりかの家に君を知る人の家に來てきみを語りぬ。

四・七・一三

若人は四人の母となりてあり母親らしきおちつきの見えて。（波多とい子に）

灯にてれる花見んと店に立ち寄りてぐらすに鼻をうちにけるかな。（森正雄君に）

ことさらによみてたもれといふ人のわがままも亦かはゆかりけり。（福田たか子へ）

四・七・二一

ボートランドにて

橋の上に立ちて見上ぐれば青山にかかれる瀧のしぶき頬をうつ。

一人身は心ゆたけし起き臥しに障るものなくひろびろとして。（竹垣君に）

涙して別れてきつつ不可思議の悦しきえにし思ひをるかな。（求道會諸氏に手紙して）

四・七・二二

晩香波にて

船出れば朝のまちに霧こめて北國に來し心地するかな。

行くところ人の情にふれながら外國の旅をつづけをるかな。

キャビラノ溪谷サスペンションブリヂにて

岩山の峯より峯にかかりたるつり橋渡り溪の水見る。

つり橋を渡りてゆけばつり橋のゆるるがままに胸のゆらげり。

千仞の崖の上に立ち向つ山の千仞の崖の巖ひだを見る。

ゆり動くつり橋の上に足とめて溪間の水の音をきくかな。

めづらしき花を見出でてわが友の車を出でて我に
摘みきし。

四・七・二三

シアトルにて

ばらの園のばらの香こむる息すひてろーんにいね
てかたりけるかな。

金の國くだものの國のあめりかはわれになさけの
國なりしかな。（あめりかを去るに のぞみて波多君に）

四・七・二五

靜岡丸にて

わが乘れる船見送りて波止場に大聲あげて泣く男
はも。

いざさらばあめりかの地よあめりかにすむ人達よ
おおいざさらば。

あめりかにありし人々多きうちに泣いて送れる人
は誰々。

あめりかに得たるしたしき人々を思ひふけりて涙
ぐむかな。

家にかへるよろこびの中にあめりかの人とわかる
る悲しみもあり。

わだつみはわれにしたしみ胸ひらきなめらかの肌に船すべらすも。

船追ひてはねもつ鳥はきたれども人はなきつつ別れつるかな。

あめりかのばらのにほへる船室に泣いて送りし人達をしのぶ。

あめりかの最後の宵に雨ふりぬあめりかの神もわかれ惜むか。

ひとりゐて旅の繪巻をくりをればいづこにも見ゆなつかしきかほ。

悪き人もあるらんものを我があひしあめりか人は皆われによかりき。

金の國きかいの國のあめりかの旅にふれけり人のなさけに。

あめりかをいだく心にてゆきければあめりかわれを抱きくれけり。

待つ人の住む國なればあめりかはふるさとのごと
なつかしきかな。

ばらの色ときやんたろぶの香にあめりかの親しき
人を比へ偲ばむ。

別れきし人達のかほとまつ人のかほとまざりてよ
りそひてくる。

そらくもり潮風寒く身にしみてあきのあはれのせ
まりくるかな。

人の群にまかれしあめりかの旅を終りひとり寂し
く船にのりけり。

四・七・二七

船室にひねもすひとりねてあればはなうたうたふ
をりもあるかな。

二月の旅のねむりのたらはぬをおぎなひあまる船
のやすらひ。

ひねもすいねてありしもくれ近み甲板にいでてあ
るきけるかな。

四・七・二八

けふもまたみそらくもりて日の見えず寒風つよく
甲板をふく。

珍らしく太平洋の船の上にたらちねの日をむかへ
けるかな。

どこ見ても陸の見えざる船の上に静心してたらち
ね懸ふる。

世のはてのいづこにゆくもたらちねはわれを離れ
ず守り給ふかな。

あたたかき船室にやすくねるにあきさむ風すひに
甲板に出る。

やむつまのみとりにつかれ後追うて君もこの世を
さりにけるかな。（清水卓治君の死を悼む）

老いし母とをさなき子らを殘しおきてこころ静か
にゆきし君はも。（同上）

うたよみし君はも今はうつしよをかへりみしつつ
うたよむらんか。（同上）

あまりよにたらふこころにゐひしれてすすむ力の
ひるまんとする。

よの總てわれにたらへり身をなげてよの肥料にも
と思ひつるかな。　四・七・二九

日のみ子は晴れて日かげの拜めねば何とはなしに
心ふさがる。　四・七・三〇

ひたぶるに一日いねたるかひありてまざまざ母を
ゆめみたるかな。

母とわし夢さめぬればひたぶるによのさびしさの
身にせまりくる。

よをさりししたしき人をかぞへつつひとり涙にく
れてをるかな。

日を見ざるながき船路のひとり旅しみじみ念佛の
あふれでるかな。

人達のあそぶいろいろの勝負事に交られもせず眼
の見えざれば。

蓄音機のいろいろの樂を聞きながらよき人戀ひて
船路なぐさむ。

船路五日やうやく旅の疲れいえてことわり思ふし
づこころ得つ。

涙してわれを送りしあめりかのをとこをんなのお
もかげまとふ。

をんなより男ぞ多きあめりかにないて別れし友か
ぞふれば。

握りたるあのこはき手に淋しさとしたしさと思ふ
あのこはき手に。

ひとり身の五十男はこはき手をかたくにぎりてお
ろおろ泣けり。

海はるか千里をこえてなきながらかもめは船を追
うてきにけり。

船ゆ流す餌に引かれて幾千里かもめは船にまとひ
くるとふ。

しあとるゆ乗りきしといふよごみ猫の馴々しくも
ないてよりくる。

あけ暮にわれをなぐさむるばらの花八重の汐路に
なつかしきかな。

船旅にあらはに人のさがを見るくひけにいろけに
まけかちのこと。

いろごとの制せられをる船の中にいろごとの多く
語らるるかな。

隣べやのきはどきいろのはなしききほくそゑみつ
つ歌をかくかな。

くれ近み雲のきれまゆめづらしく日の照りければ
こころいさみぬ。

日のみ子は日かげ拜みてたらちねにあへるがごと
く喜べるかな。

ふと氣のむいて石とり船長と碁をかこみけり船の
つれづれ。

風かはりこころもかはり大洋のながき船路の日に
あらたなり。

うつるままに心のたづなゆるめおきそを眺めつつ
樂しみをるも。

涙してわれを送りし人達と日々にへだたる潮路を
ぐらき。

いへばいきのくへば食物のもれいでて心よからず
前齒のおちて。

四・七・三一

あめりかの人のなみだのきりとふり千里はるばる
わが船を追ふ。

甲板にたてばつめたききりさめのやわほをいたく
うちにけるかな。

めぐまれのわがゆく船のゆく道ぞ晴れてむかへめ
せ天地の神。

外國のわかき女のただひとり食堂の花と咲きにけ
るかな。

この花は船にゐひてかしをたれてつひに食堂に見
えずなりけり。

船少しゆるぎにければ靜まりてことわりふかくお
もひふけりぬ。

日を見ざるけふの船路の心うしと船長のいふをき
けばをぐらき。

四・八・一

まひる日をはかりえたりと船長のはれやかにいへ
ば嬉しかりけり。

船長のかほはにこやかなるぞよきすべてが彼によ
りかかりをれば。

わが心曇りてあればそらくもりこころ晴るればそ
らまた晴れん。

あるは一日早くつかんときしより船のあゆみを
もどかしく思ふ。

まつ人のこころかよひてあすよりは日かげほがら
に船を照さん。

わがいぬるひまもやすまず船子らは火たきかぢとり船をはしらす。

大洋のまなかをはしる船に乘るいろいろの國の人したしめり。

四・八・二

霧ふかくゆくてさだかにわからねば汽笛ふきつつ船はすすめり。

他の船の來るやもするといましめの汽笛ならしてきりの中ゆく。

道に迷ふ人の悲鳴をあぐるごと船の汽笛のあはれなるかな。

晝飯の食卓に船長のかげ見えず汽笛の音のつづききこえて。

他の船にあへるあひづの汽笛かと甲板に出ればきりふかきかも。

うちつづくきりにあきたる旅人のかごとがましくつぶやけるかな。

天候のあしきを誰かの業のごと憤りをる人のありけり。

ばらの花は遂に皆ちりあすぱらかすの青き葉のみの我にむかへり。

東半球にいりし祝のしるしとふ赤飯の供養をうけにけるかな。

霧はれよはやく霧はれ晴れやかの日のおんかほのをがみたきかな。

船のあと追うて船についてきし鷗はいつか見えずなりけり。

先生とよばるるにいつかなれなづみわが名よばれて心よからず。

人の師に非ずといひつついつしかに師となり濟しをるがをかしき。

船旅にながくなれては波高きをりにも酔にいたくなやまず。

船ゆればゆるるに任せてねつおきつ逆はでをれば
いたくもよはず。

われ船に強しといひしも今はそをいはずなりけり
かくてえよはず。

大洋を旅する船に海の水わかしたる湯に夜毎くつ
ろぐ。

船の湯にぬくまりをれば船うごき湯ぶねも動き身
も亦うごく。

ひくごゑにうたのもれでるをりもあり船の湯つぼ
に手足のばして。

四・八・四

きりの海いそぎこぎわけ日の光るみ國へ船の進み
ゆくかな。

夏まなかあつさを知らぬ船旅にくもりつづくる不
足はいへじ。

わが法はわがたくめるにあらざれば法おのづから
ひろまりてゆく。

法の道は道の力に人をひくなにを教へて弟子とよぶべき。

よこしまの心あらねば税關もゆめおそろしきところにあらず。

拂ふべきことわりあらば拂はんと心きまればうきこともなし。

ものもたぬ人にとるべき税もなしものもてばこそ税もいるなり。

晴れ晴れと日かげ拜まぬ日の續きひとしほ日影の戀はれぬるかな。

夕毎に日にのこさるるかなしみを味ひながらなほ後を追ふ。

日の見えぬ日數かさなり日を戀ふる歌のみ多く口ずさまれぬる。

日のあしの船のあしより早ければ船を殘して日の遠くゆく。

殘されし船はまくらの海原を日のあと追うて急ぎゆくなり。

みんなみの晴れたる海のおもしろしくもれる北の海路またよし。

ぎりぎりとあせするごとき暑き日に照されたしと望みをるかな。

四・八・五

たまさかに圓いお日様のお顏みてお懷かしうといひたかりけり。

甲板に白き光の流れをるをふみつつなにかうれしかりけり。

たまさかの日かげ嬉しくはしやぎしもしばしの間にて霧の來れり。

きりふかく笛ならしつつ船はゆく食卓に船長のすがた見えなく。

四・八・六

きりはれて油のごとき海の上を船の走ればこころうきたつ。

ふるさとの親しき人ら日をかぞへむねをどらせて
われまつらんか。

日の本につく日近づきたるためか日を見しためか
けさは氣のうく。

あまり海のおだやかに船のゆるがねば止まれるか
と思ひたりけり。

うれしさにむねをどらしてまつ人の心かよひて波
やや高し。

四・八・七

潮をはくくぢらといるかの群のほかものにであは
ず長き潮路に。

四・八・八

金華山がもう見えますとけたたましう女のつれの
室にきたれり。

日の本のお山が見ゆるあの山のあなたになつかし
い人の住むなり。

けふは海に船も多く見え日の本の山もをがまれこ
ころいさむも。

ここしばし海に月見るをりなしとことさらに甲板に月を見にでる。

月見んと甲板にでれば五日月あはや波間に半ばいります。

波に入りし月のなごりのみ光をあかずみてあれば涼風のふく。

わがふねのゆくてに光るいなづまをわれを迎への花火かと見る。

家の子ら揃うてわれをむかふてふしらせうれしく海もなぎたり。

食堂のなじみの人に海のうたをかきしたんざくをわかちたるかな。

あすは日本につく喜びをもちながら船のなごりの惜まるるかな。

船にをるも今宵かぎりといねがてに星の光に海の面見る。

四・八・九

わだつみの別れを惜む涙かもけさきりこめて船をとめけり。

かりそめに船にあひたる人なれど別れとなれば名殘りの惜しき。

四・八・一〇

地球をめぐりて 終

編輯の後

私が三十一文字の歌を習ひそめたのは、まだ十三歳の頃であつた。明治二十二年の秋、私は、金澤市にあつた共立尋常中學校の一年に這入つた。その頃、國語の先生に景樹派の歌人高橋富兄先生がお出になつた。その先生の手ほどきで歌を作りそめた。明くる年に金澤市の三百年祭の祝意を表するために、梅を詠じた歌の集を高橋先生が發行せられた内に私の歌を加へて下さつた。これが私の歌の印刷になつた始めてである。三年のときに學校を代つたので、高橋先生に師事することが出來なくなつた。明治二十六年に京都の大谷尋常中學校に入り、その明くる年の頃から歌を多く詠むやうになつた。落合直文氏や佐々木信綱氏や井上通泰氏やの歌が『めざめし草』に出るのを喜んで讀んでゐた。その頃出版せられた與謝野鐵幹氏の『東西南北』も喜んで讀んだ。景樹の歌や『新古今集』の歌を面白く思うてゐた。正岡子規氏が新聞『日本』に歌論を掲げ、歌を出し始められてから、それに導かれて『金槐集』や『曙覽集』やを讀むやうになり、『萬葉集』も讀むやうになつた。でも、今か

ら思ふと、歌道の中心がつかまれてゐなかつた。眞宗大學に這入つてからも、歌を詠みつづけてゐた。明治三十三年に學校を了へて東京に出た。それ以後縁にふれては歌を詠むことを忘らなかつた。それから今日まで誰に見て貰うたといふではなく、どの歌の雜誌に投書したでもなく、人の乞ふがままに短冊に書いたり、自分の個人雜誌に折々は發表したりして來た。折には『あららぎ』や『明星』などの歌を讀んだこともあつた。石川啄木の歌も好きである。伊藤左千夫氏の歌も好きであつた。大正八年の頃、長崎で齋藤茂吉氏に逢うて、一夜を歌作にふけつたこともあつた。詩集は明治三十六年に『迷の跡』といふのを出した。大正十年には『生くる日』『温かき大地』『諸行無常』『華嚴三昧の中より』の四部の詩集を出した。この集の中には三十一文字の詩として和歌をも加へておいた。これより先き、大正五・六年頃に出した『更生の前後』『獨立者の宣言』『前進する者』の三部の論文集の中にもその折の歌を併せ錄しておいた。今日まで詠み出でた歌數はずゐぶんたくさんにあるが、多くは反古になつてしまつた。三十一文字詩の集を出したらばとの知人のすすめもあつたので、此度、ふと思ひたつて大正十五年の十二月印度佛跡巡拜に旅立つてから支那・印度・

ゼルサレム・エジプト・歐羅巴の諸國をめぐつて昭和二年七月にかへつて來るまでの歌や、その後、南は九州・沖縄に、北は北海道・樺太に或は朝鮮に旅行した折の歌、それから本年四月アメリカに旅立つてから八月歸國までの歌の數々を集めて『地球をめぐりて』と題して出版することにした。集めて見ると、ずゐぶんたくさんの數になつた。この外詠みすてた歌もたくさんあらう。私は歌人とならうといふやうな志願を起したことはない。だから、私の歌は、ただ好きな道だといふにすぎない。從ひて今の多くの歌人たちの前に出すには、あまりに粗野なものである。しかし、粗野なものでも、私の生活そのものを詠んだものなので、かはい子のやうな氣がする。素人の歌だけに、玄人の方の味はれないところも持つてをることを自信してをる。こんどは、いはゆる日本の歌壇の方々に一讀を願つていろいろ御指導を仰ぎたいと思うてをる。私はこの集にあつめた歌の外にまだまだたくさんの歌を詠みつつあるのである。それで、今後ももつとたくさんの歌を詠むことであらう。だから、この集をひらいて下さる方は忌憚なく私に御指導を與へていただきたい。それを承つて私の好きな道への精進のあかしにしたいと思ひます。いはゆる歌詠みの方に一

讀していただかうと思うて集めたのだが、その寄贈の分だけ印刷するわけにもまゐらぬので、私を知つてをられる方々にも讀んでいただくためにたくさんの部數をも刷つたわけである。私の寄贈しない方でも若しお讀みになつて御所感があつたなら御批評と御高敎とを惜まれないことを切に念ずる次第である。

昭和五年の正月二十八・九の兩日母の七回忌を營むに際し靈前にこの集を捧げ得ることを喜んでをるのである。

ちなみに、先年歐洲に遊んだ頃巴里にていろいろお世話になつた中村研一畫伯が好意をもつてこの集の裝釘の意匠をして下さつたことをここに錄して感謝の意を表する。

昭和四年十二月二十八日

北安田にて

曉鳥敏

目次

一。印度の旅

大正十五年十二月より昭和二年二月まで

福建沖にて……一
香港にて……二
南支那海にて……三
シンガポールにて……五
マラッカ海峽にて……六
大正天皇崩御……九
コロンボにて……一一
カンディにて……一二
アヌルダプラにて……一四
マヂュラにて……一五
カルカッタにて……一五

ヒマラヤにて……一六
耆闍崛山にて……一九
佛陀伽耶にて……二一
鹿野苑にて……二二
恆河にて……二四
ベナレスにて……二五
佛涅槃地にて……二五
ルンビンデにて……二八
祇園精舍にて……三二
デリーにて……三五
エロラにて……三六

二。歐羅巴巡り　昭和二年三月より同七月まで

アラビヤ海にて……三七
ゼルサレムにて……三九

ナザレにて……四〇
タイベリヤにて……四一
ハイファにて……四四
エジプトにて……四五
アテネのアクロポリスにて……四六
コリントにて……四六
コンスタンチノーブルにて……四七
ドナウ河にて……五〇
ウキンにて……五〇
ヴエニチヤにて……五三
ローマにて……五三
アッシジにて……五三
フイレンチエにて……五四
アルプスを見て……五四

リオンにて……五五
ゼネブにて……五六
ベルリンにて……五八
ワイマルにて……五八
ウキスバーデンにて……六一
ライン河にて……六一
パリーにて……六二
シベリヤにて……六三

三。休む日のなき　昭和二年九月より同十二月まで

北安田にて……六五
東京松谷家にて……七五
中野岡本邸にて……七五
仙臺伊澤氏邸にて……七七
淨法寺より伊澤氏に……七七

淨法寺小田島家にて……七八
北福岡にて……八〇
盛岡にて……八〇
大澤温泉にて……八二
本莊にて……八三
鶴岡にて……八四
京の驛にて……八四
刈田にて……八四
福岡にて……八四
木屋にて……八五
大牟田にて……八五
熊本にて……八六
八代にて……八八
人吉にて……八九

志布志にて……九〇
知覽にて……九四
菊永にて……九五
伊牟禮にて……九七
鹿兒島にて……九八
糸魚川にて……九八
新潟にて……九九
新發田にて……一〇一
暮の歌……一〇二

四。鏡餅

昭和三年一月より同三月まで

元旦……一〇九
涅槃會をするとて……一一一
病床にて……一一一

五。青葉若葉

昭和三年四月より同六月まで

福井にて……一二四
大阪にて……一二五
那覇にて……一二七
今歸仁にて……一二九
那覇にて……一三〇
運天にて……一三一
那覇にて……一三二
家にかへりて……一三三
山遊び……一三四
奥にて……一三八
新居濱にて……一三九
まごゝろ……一四一
北安田の六月……一四四

六。東北の旅　昭和四年六月

本荘にて……一五〇
角間川にて……一五二
金山にて……一五五
黒澤尻にて……一五六
盛岡にて……一五八
淨法寺にて……一五八
三戸にて……一六〇
鮫にて……一六〇

七。北海道の旅　昭和四年七月

湯の川にて……一六二
目名にて……一六四
蘭越にて……一六五

狩太にて……一六五
車中……一六五
小樽にて……一六六
北村にて……一六七
旭川にて……一七一
睡蓮十首……一七四
帶廣にて……一七六
札幌にて……一七七
磯谷にて……一七八

八。樺太の旅　昭和四年七月

大泊にて……一八一
豐原にて……一八四
知取へ行く途中……一八五
知取にて……一九一

新問にて……一九二
泊岸にて……一九三
敷香へ行く途中……一九四
敷香にて……一九六
敷香よりの歸途……一九七

九。日ざかり　昭和三年八月

湯の川にて……一九九
黒石にて……一九九
花輪にて……二〇〇
浅蟲にて……二〇〇
大洗にて……二〇一
願入寺にて……二〇二
義公の墓に詣でゝ……二〇三
西山莊にて……二〇三

沈石寺にて……二〇三
一握の藁……二〇三

一〇。朝鮮雜詠　昭和四年八月より同九月まで

釜山にて……二〇七
京城にて……二〇八
牡丹臺にて……二〇八
三墓里にて……二〇九
開城にて……二〇九
仁川にて……二一〇
鐵原にて……二一〇
井邑にて……二一一
群山にて……二一二
論山にて……二一二
慶州にて……二一三

大邱をたつ……二一六
鎭海にて……二一七
船中にて……二一八

一一。紅葉する頃

昭和四年九月より同十二月まで

戸畑にて……二一九
大分にて……二二〇
佐賀にて……二二一
福岡にて……二二三
木屋にて……二二六
大牟田にて……二二九
熊本にて……二二九
八代にて……二三二
湯の前にて……二三三
人吉にて……二三五

伊牟禮にて……二四〇
知覽にて……二四一
菊永にて……二四一
途中……二四四
鹿兒島にて……二四五
飯野にて……二四五
志布志にて……二四六
津久見にて……二四六
途中吟……二四七
櫻井にて……二四七
五箇庄にて……二四八
初孫宣を得て……二四九
歳暮雜詠……二五四

一二。寒風の中を

昭和四年一月より同三月まで

福井にて……二五七
磯波にて……二五八
北海道へ行く人の餞別として……二五九
別府にて……二六一
耶馬溪にて……二六二
深耶馬溪にて……二六二
戸畑にて……二六三
直方にて……二六四
香月にて……二六五
刈田にて……二六六
後藤寺にて……二六八
法事を營みて……二六八
聖德太子の御陵にて……二七〇
鹿谷寺にて……二七一

岡山にて……二七二
吉備津にて……二七四
倉敷にて……二七四
廣島にて……二七五
出雲大社に詣でゝ……二七六
平井氏の屏風にかける歌のうち……二七六

一三。北米の旅

昭和四年四月より同七月まで

北安田にて……二七九
京都にて……二七九
西の宮にて……二八〇
天洋丸にて……二八〇
ホノルルにて……二八八
火山にて……二八九
ヒロにて……二九〇

カワイ島にて……二九二
ホノルルにて……二九四
春洋丸にて……二九六
オークランドにて……三〇〇
シイラネバタにて……三〇四
オグデンにて……三〇六
デンバアにて……三〇六
途中……三〇七
ナイヤガラにて……三一〇
ニウヨルクにて……三一二
紐育の五十七階のウォル塔に上りて……三一二
コンコルドにて……三一三
ロングアイランドにて……三一四
ニユ・ロツセルにて……三一四

ヒラデルヒヤにて……三一五
ワシントンにて……三一五
テキサスにて……三一六
ニユオルレアンスをたつ時に……三一七
アリゾナにて……三一七
ロサンゼルスにて……三二〇
サリナスにて……三二一
モントレイにて……三二一
ビツグツリーにて……三二四
ヨセミテにて……三二四
オークランドにて……三二八
ポートランドにて……三二九
晩香波にて……三三〇
キヤピラノの溪谷サスペンションブリヂにて……三三一

シアトルにて……三三二
靜岡丸にて……三三二

編輯の後……三六五

規約

にほひぐさは私の著作集のやうなものです。毎月一回宛發行したいと思うてゐます。澤山書けた時には頁數の多いのを出し書けない時には小さいのを出します、少しも書けない時には出さないのです。ですから毎號定價が變ります。で、大ざつぱに一年分拾圓、半年分五圓としておきます。前金で申込まるる方はその積りで申込んで下さい。さうしますとその號その號の分を引き去り入金のあるだけの分の本を送ることにします。出さなくなつたなりには前金を返すことは勿論のことです。

昭和五年一月十日印刷
昭和五年一月十五日發行　（一一二五〇〇）

定價金貳圓

著作者　石川縣石川郡出城村北安田　曉烏敏
發行人　京都市烏丸通七條下ル西入　堀井清
印刷者　京都市東九條山王町三八　弘文社印刷所
印刷所　石川縣石川郡出城村北安田　香草舍
發行所　電話松任一一八番　振替金澤三六九八番
賣捌所　東京市本郷區春木町二　森江書店
賣捌所　京都市東六條烏丸　一生堂書店

曉烏敏主要著作目錄

◎欽異鈔時代より無量壽經時代への三部作

第一卷	更生の前後	第十一版	金參圓
第二卷	獨立者の宣言	第七版	金貳圓五拾錢
第三卷	前進する者	第六版	金貳圓八拾錢

◎佛說無量壽經叢書

阿彌陀佛の生るゝまで		第五版	金壹圓
嘆佛偈講話		第三版	金壹圓貳拾錢
阿彌陀佛とその師との問答		新刊	金壹圓
阿彌陀佛の本願	上卷	新刊	金壹圓五拾錢
阿彌陀佛の本願	下卷	新刊	金壹圓五拾錢
三誓偈講話		第六版	金壹圓
阿彌陀佛の修行とその淨土		新刊	金壹圓七拾錢
信心生活の種々相		新刊	金壹圓貳拾錢
東方偈講話		第五版	金壹圓參拾錢
五惡段講話		第六版	金壹圓五拾錢

◎にほひぐさ叢書

第一卷　生くる日　第六版　金壹圓貳拾錢
第二卷　親鸞聖人論　第九版　金壹圓貳拾錢
第三卷　死の國々　第六版　金壹圓參拾錢
第四卷　父の印象　第三版　金壹圓貳拾錢
第五卷　溫かき大地　第二版　金壹圓四拾錢
第六卷　諸行無常　第二版　金壹圓貳拾錢
第七卷　華嚴三昧の中より　第二版　金壹圓五拾錢
第八卷　常倫を超出する者　第五版　金壹圓五拾錢
第九卷　不可說轉の記　第三版　金壹圓
第十卷　沈默の自殺者　第二版　金貳圓
第十一卷　母の　第二版　金貳圓
第十二卷　精神　第二版　金貳圓
第十三卷　內省せられたる自己　第二版　金貳圓五拾錢
第十四卷　老境の黎明　新刊　金參圓
第十五卷　地球をめぐりて　新刊　金貳圓

◎パンフレット

第一　運命論者の群　第十二版　金貳拾五錢
第二　華嚴經の歸趣　第十版　金拾五錢
第三　蓮如上人論　第九版　金拾五錢
第四　道の話　第七版　金拾五錢
第五　ソクラテス　第六版　金貳拾錢
第六　親鸞聖人の信念　第九版　金貳拾錢
第七　神を超えた人間　第六版　金參拾錢
第八　人生の矛盾とその解決　第六版　金貳拾錢
第九　佛敎の根本精神　第四版　金參拾錢
第十　肉體の彼岸　第二版　金貳拾五錢
第十一　尊嚴なる存在の認識　第二版　金參拾五錢
第十二　無罪の宣言　第二版　金拾五錢
第十三　新日本の進路　第二版　金拾五錢
第十四　國土の攝取と莊嚴　第二版　金參拾五錢
第十五　信の提唱　第二版　金貳拾五錢
第十六　自治の精神　第二版　金貳拾錢
第十七　眞實信について　第二版　金參拾五錢
第十八　生活中心の決定　第二版　金貳拾錢
第十九　この師とこの弟子　新刊　金拾錢
第二十　社會推移の根本的考察　新刊　金貳拾錢
第二十一　主觀的信念の客觀的妥當性

◎別刊

印度佛跡巡拜記（曉烏敏・暉峻康範共著）　金貳圓五拾錢

まこゝとの心（『信の提唱』のローマ字書き）　金七拾錢

智慧について（元大阪藝術教育協會發行）　金壹圓

人（隨筆、京都中外出版株式會社刊行）　金五拾錢

釋迦基督その他（東京春秋社刊行）　金貳圓貳拾錢

◎曉烏敏月刊個人雜誌

願慧　毎月一回一日發行　定價金拾錢　一年金壹圓

◎曉烏敏編輯　佛教聖典叢書

第一編　佛涅槃經　林五邦譯　金四拾五錢

第二編　六方禮經　林五邦譯　金拾貳錢

發行所　石川縣石川郡出城村北安田　振替　金澤三六九八　香草舍

MADE IN JAPAN.